

## T 日程・英語外部試験利用入試 1 限

科目	ページ
数 学 ①	2～13
数 学 ②	14～41
地 理	42～49
国 語	75～52

## 〈注意事項〉

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 志望学部・学科によって選択する科目・試験時間が決まっているので注意すること。

志望学部(学科)	受験科目	試験時間
下記以外の学部(学科)	数学①または国語	60分
文学部(日本文)	国 語	90分
文学部(地理)	地 理	60分
情報科学部(コンピュータ科・デジタルメディア)	数学②	90分
デザイン工学部 (建築・都市環境デザイン工・システムデザイン)		
理工学部 (機械工〔機械工学専修〕・電気電子工・応用情報工・ 経営システム工・創生科)		
生命科学部 (生命機能・環境応用化・応用植物科)		

4. 科目の選択は、受験しようとする科目の解答用紙を選択した時点で決定となる。  
一度選択した科目の変更は一切認めない。
5. 数学②・国語については、志望学部・学科によって解答する問題番号が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。
6. 数学①②については、定規、コンパス、電卓の使用は認めないので注意すること。
7. マークシート解答方法については、問題冊子を裏返して裏表紙の注意事項を読みなさい。ただし、問題冊子を開かないこと。
8. 問題冊子のページを切り離さないこと。



言語

●法学部・文学部(哲・英文・史・心理学科)・経済学部・社会学部・経営学部・国際文化学部・人間環境学部・現代福祉学部・キヤリアデザイン学部・G・I・S(グローバル教養学部)・スポーツ健康学部のいずれかを志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕に解答せよ。

●文学部日本文学科を志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕すべてに解答せよ。

〔一〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの語の意味として最も適切なものを、下の選択肢の中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

1 詭弁 ア 人々を従わせることを目的とした、高圧的な発言

イ 道理に合わないことをもともたしくこじつけた弁論

ウ 体面を保つために組織的に準備された、多くの虚言

エ 自らが受けた厚意に対して心の底から述べられた謝意

オ 多くの人々の理解を促すために使われる、巧みな比喻

2 斡旋 ア 罪や動機を告白すること

イ 美しい音楽を奏でること

ウ ぜいたくに暮らすさま

エ 間に入ってうまく取りはからうこと

オ 比較にならないほど優れているさま

問二 つぎの故事成語の空欄に当てはまる言葉として最も適切なものを、下の選択肢の中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- |   |     |   |   |    |   |    |   |     |   |    |   |                        |
|---|-----|---|---|----|---|----|---|-----|---|----|---|------------------------|
| 1 | 蛍雪の | ア | 誉 | イ  | 窓 | ウ  | 嘆 | エ   | 政 | オ  | 功 |                        |
| 2 | 逆鱗に | □ | ア | 倣う | イ | 乗ず | ウ | 触れる | エ | 笑う | オ | 棹 <small>さし</small> さす |

問三 つぎの各文の傍線部のカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

- a N氏は、新進キエイの作曲家だ。
- b 情状シャクリヨウの余地がある。
- c カイシンの笑みを浮かべる。
- d 定説を根底からクツガエす論文。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

世の中にはさまざまな政治現象が存在し、その現象がなぜ生じているのかについて議論がなされる。戦後の日本で投票率が低下してきたのはなぜだろうか。日本で議員による立法が少ないのはなぜだろうか。なぜ日本の首相は短い任期でころころ替わることが多かったのだろうか。そこで求められるのは、問いに対する答えである。すなわち原因の探求である。ある現象がなぜ生じているのかを説明するということは、因果関係の推論を行うということである。本稿では、どのような場合に因果関係が存在すると言えるのかを考えるとところからスタートしよう。因果関係推論の基本的なフレームワーク(枠組み)を示すことが本稿の目的である。

アメリカのビジネスの世界では、肥満や喫煙習慣は出世にとって不利だとよく言われる。太っていることは、喫煙をやめられないことと同様、自分をコントロールできないことの証拠であり、エリート・ビジネスマンに必要な自己管理能力の欠如を示しているともみなされ昇進する上で不利になる、ということらしい。そこまで言わなくてもよいではないかとも思ってしまう。身体的特徴に基づく不当な差別である、という批判が出てくるのも当然かもしれない。しかし、これについての当否はともかく、身体上の特徴が原因となって出世や所得に影響が出るといふ因果関係は、はたして現実に存在しているのか。

身体的特徴と所得の関係は、人々の関心と興味を引き付けてきた。中でも、身長と所得や出世の関係については、ずいぶん昔から関心が寄せられてきた。身長と労働市場での成功の間関係についての実証研究には、百年近い歴史がある。一九一五年には、ゴウインが身長の高い人ほど出世しているという調査結果を報告している。その後も同様の調査報告は、繰り返して報告されてきた。イギリスでは、三十歳の男性管理職・専門職の人は、同年齢の男性一般労働者よりも平均して一・五センチメートル背が高いという。さらに、イギリスとアメリカの男性のデータでは、一インチ(二・五四センチメートル)背が高いと、平均して時給が一パーセントから二・三パーセント高いことも確認されている。このように、身長が高いことによって「得られる」所得増加分を身長プレミアム(身長による賃金格差)という。

身長プレミアムは、いかにして生じるのだろうか。身長が原因となって所得が決まる、などということが本当にあるのだろうか。因果関係に関する問いが生まれてくる。

計量分析の世界では、原因を「独立変数」や「説明変数」、結果を「従属変数」や「被説明変数」と呼ぶ。ここでは、便宜上「独立変数」と「従属変数」という用語のみを用いることにする。確認しておきたいことは、「身長」という独立変数の変数値が大きいほど「所得」という従属変数の変数値が大きくなるという「因果関係」が、この因果関係の問いを生む前提になっていることである。因果関係の推論は、この因果関係の確認から通常はスタートする。

では、なぜこのような因果関係が観察されるのだろうか。背が高いと周りから信頼感を得やすく、仕事上のパフォーマンス（実績）も自ずとよくなるからだろうか。あるいは、自分に自信を持つために仕事にも積極的になって成功するからだろうか。このような推論は、実際に身長が所得に影響を及ぼしていることを想定している。しかし、もしかすると身長が高いということは、子どものころから裕福な家庭に育って栄養状態が良かった結果であり、また裕福な家庭であったから高い教育を受けることができ、現在の所得も高くなっているのかもしれない。それならば、背の高さは所得を決める本当の原因ではないことになる。

後者の例では、本当に所得に影響しているのはその人が裕福な家庭に生まれたことである。つまり、親の所得が原因であり、観察された身長と所得の因果関係は単に見掛け上のものということになる。このような関係は、「偽の相関」とも呼ばれる。因果関係があると言えるためには、親の所得のような他の変数が同じ値をとったとしても、なおかつ独立変数である身長が従属変数である本人の所得に影響を及ぼしていることが必要である。他の変数の影響をそろえる、すなわち統制（コントロール）した上でも、因果関係が確認できなければならぬ。

はたして身長と所得の間に本当の因果関係があるのだろうか。アメリカでの最近の研究は、この点について対立している。ニコラ・ペルシコたちは、白人男性を対象として、親の所得や本人の教育程度などをコントロールした上で、本人の十六歳時点での身長が後の所得に影響しているという結果を *Journal of Political Economy* 誌に発表している。アメリカでは、十

六歳時点で背が高い子どもは高校のスポーツクラブなどに参加することが多くなり、そこでコミュニケーション能力といった「人的資本」を身に付ける。この結果、将来の所得が高くなるという因果関係を、彼らは推論している。これに対して、アン・ケースとクリステイナ・パクソンは、同誌において、背の高い子どもほど高い認知能力を持っているという関係を強調し、身長が原因ではなく認知能力が真の原因であることを主張している。ここでは、まさに身長と所得との間の「共変関係」が、真の因果関係を示しているのか、単なる偽の相関であるのかが争われているのである。

なお、この身長プレミアム研究を簡潔に紹介している大竹文雄の『経済学的思考のセンス』には、大阪大学のアンケート調査を利用した日本での研究結果が紹介されている。それによれば、日本における身長プレミアムは、学歴、勤続年数、企業規模に加えて、親の学歴や育った家庭の生活水準までコントロールした上で、一センチメートル身長が高くなることによって〇・五パーセント時給が高くなる程度だという。ただし、「統計的にはこの〇・五という数字は、本当はゼロかもしれないという可能性を棄てきれない」という。この調査結果は日本では、身長自体が所得に影響している可能性は低いことを示している。

さて、今、日本人の四十歳男性を調査した結果、実は身長ではなく体重と所得との間に共変関係があったと仮定しよう。すなわち、体重が重い人ほど所得も高いという関係が観察されたとする。他の変数をコントロールしたとしても、この共変関係が消えない。はたして、ここでわれわれは、体重が所得に影響していると考えてよいだろうか。考えなければならぬもう一つの問題が、因果関係の向きである。身長の場合は、二十代を過ぎればそれ以上伸びることは考えにくい。しかし、体重は年齢を重ねても増減する。所得の高い人は美味しいものをたくさん食べるので太ってしまうという可能性もある。因果関係は、どちらに向かっているか、このデータからだけではわからないのである。因果関係が成立するためには、原因すなわち独立変数の変化が、結果すなわち従属変数の変化に時間的に先行していなければならぬ。

高根正昭は、今や研究方法論教科書の古典となった名著『創造の方法学』において、以上見てきた三つを、因果関係が成立するための条件としてあげている。すなわち、

- ① 独立変数と従属変数の間に共変関係がある
- ② 独立変数の変化は、従属変数の変化の前に生じている(時間的先行)
- ③ 他の変数を統制(コントロール)しても(他の変数の値を固定しても)共変関係が観察されるの三つである。

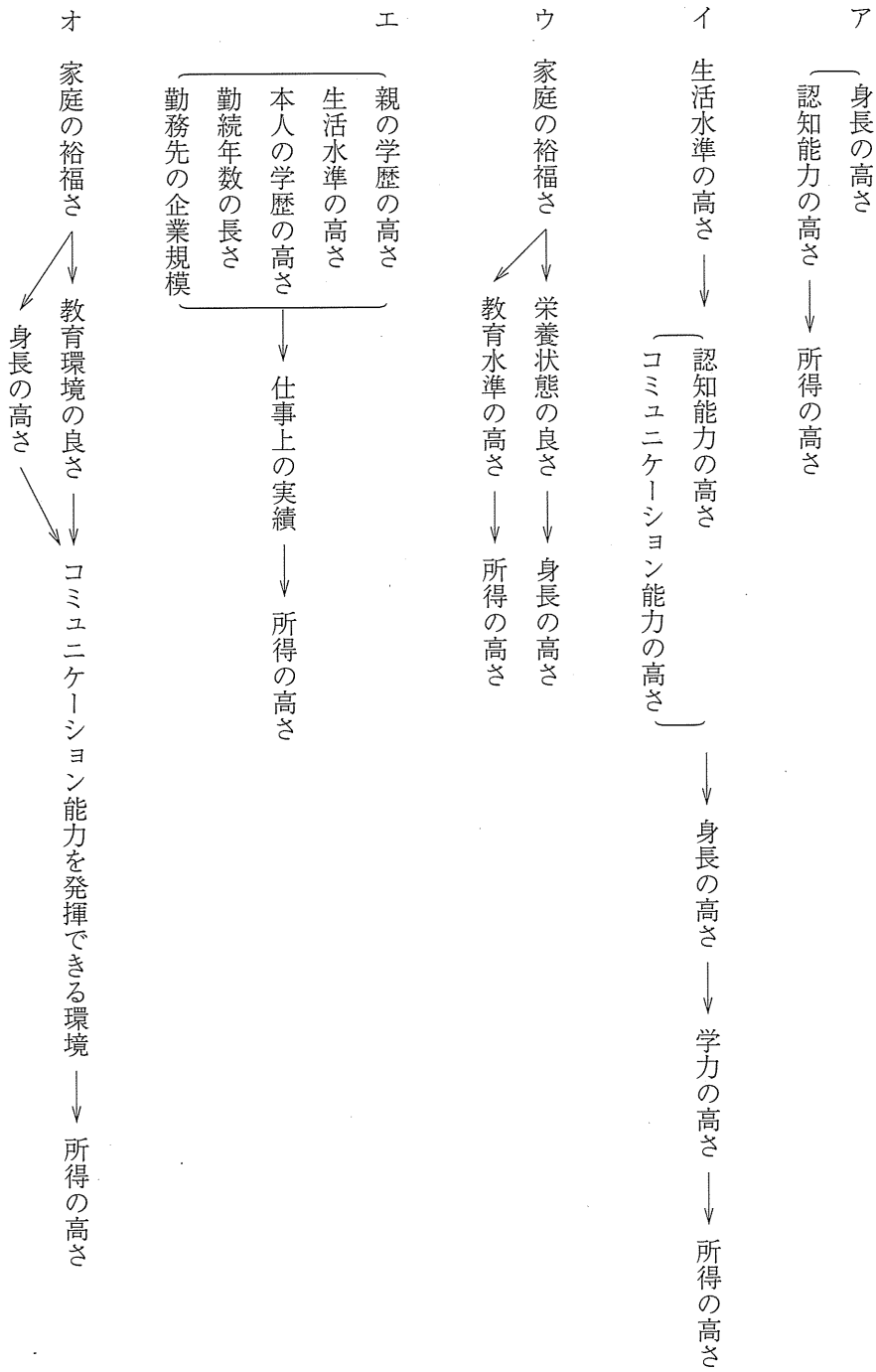
因果関係が成立するための三条件を意識することは、歴史研究や事例研究など少数の事例を扱う質的な研究においてもきわめて重要である。また、投票行動のような個人の行動の研究のみならず、マクロな社会現象を研究する際にも必要である。そのような研究で因果関係に関する主張がなされるかぎり、その主張に含まれる独立変数が何で、従属変数が何か、どのような因果関係が想定され、いかなる因果のフローチャートが描けるか、因果関係に関する三つの条件はどのように確認されているかを考えることは、研究を進める上で重要なのである。

(久米郁男『原因を推論する―政治分析方法論のすゝめ―』より。文章を一部改変した)

問一 本文では、「高身長」が「高所得」の原因であるとする推論が挙げられているが、その模式図として適切なものをつぎの中から二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 親の所得の高さ → 生活水準の高さ → 子どもの身長の高さ → 学力の高さ → 所得の高さ
- イ 身長の高さ → 認知能力の高さ → コミュニケーション能力の高さ → 所得の高さ
- ウ 身長の高さ → 自信、周囲からの信頼 → 仕事上の実績 → 所得の高さ
- エ 家庭の裕福さ → 身長の高さ → 学力の高さ → 所得の高さ
- オ 身長の高さ → コミュニケーション能力が身に付けられる環境 → 所得の高さ

問二 本文では、「高所得」の原因が「高身長」以外にあるとする推論が挙げられているが、その模式図として適切なものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。





問三 本文では「共変関係」という語がくりかえし用いられているが、その語の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。なお、任意の現象をX・Yと呼ぶこととする。

- ア Xの値が増加したことによって、Yの値も増加する。
- イ Xの値が増減するとき、Yの値も増減している。
- ウ Xの値を固定すると、Yの値が変化する。
- エ Xの値とYの値が同時に増減するが、両者の間に因果関係はない。
- オ 他の要因によって、Xの値の変化とYの値の変化が比例関係になる。

問四 つぎの中から本文の内容に合致するもの一つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 独立変数の変化が従属変数の変化よりも後に起こっている場合は、因果関係は成立していないと言える。
- イ アメリカの研究者は、体重や喫煙習慣よりも身長や家庭環境に注目して労働者の能力を測定しようとしている。
- ウ 日本の身長プレミアム研究によると、家庭環境や生活水準が中流である場合は、生涯所得に大きな差はない。
- エ 独立変数と従属変数の微妙な差を見出すことが、社会を研究するときにも個人を研究するときにも重要である。
- オ 体重の重い人ほど所得が高いというデータは、高所得者の食生活が偏っていることの裏付けとなる。

問五 二重傍線部「偽の相関」とあるが、どういう意味か。具体例を使わずに、つぎの形式にしたがって、三十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

という意味。

(三) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

「AI脅威論」とは逆に、AIの進化を人類の幸福に寄与するものとして、楽観的に捉える人々も存在する。確かに、AIによつて生活の様々な面が便利になるということは否定できないし、AIのおかげで解決不能と思われてきた問題も改善されるかもしれない。もしかしたら、人間の能力自体が、AIの力がかつてないほどに高められる可能性もある。

だが、それはあくまで、AIは人間にとつて「道具」なのだ、という発想が前提となる。果たして、AIは道具と呼べる存在なのだろうか。

<sup>1</sup> AIが道具かどうかはとりあえず置くとして、「技術」であることは間違いない。では、技術とはいったいどのようなものなのだろうか。「あたらしい技術」が世の中をかつてない姿に変えていく時代、これまで哲学者たちが展開してきた様々な議論を改めて整理しておきたい。

アメリカの哲学者アンドリュウ・フィンバークはその著書『技術への問い』の中で、技術論を次に挙げる四つに分類している。多少、難しくなるが概略を述べておこう。

まず「<sup>2</sup>決定論」は、技術自体は非常に価値中立的(善でも悪でもない)とする考え方だ。さらに、社会と関係なく自律的に進化していく技術を人間が管理することはできないので、技術に対して批判しても意味はないと考える。

フィンバークは、伝統的マルクス主義を「決定論」として見ている。製造技術が組織構造や労資関係、労働過程、労働者意識を規定すると考えるからだ。このように技術が社会構造や関係性、意識などに多大な影響を及ぼすと考える「決定論」は、技術的・科学的な判断が、それ無しの判断よりも優れているという感覚に近づいてくると、技術的な判断で科学的に物事を決めていくテクノクラシー(技術による政治)を必然的に招くことになる。

近年、民主主義が機能不全に陥りつつある状態が明らかになるにつれ、国民のビッグデータを解析し、その中から導き出された一般意志に従つて政治を行うといったアイディアも出るようになったが、こうした考え方は非常に「決定論」的な技術観を

感じさせる。

これに対し、AI楽観論の前提となる「道具主義」は、技術を人間が自然を支配するための単なる道具と捉え、技術自体は同じく価値中立的だが、コントロールすることは可能だとする。技術は人間の目的を達成するためのものであり、それ自体に目的があるわけではないというのが、「道具主義」の基本的な考え方だ。

フィンバーグが次に挙げるのは、ハイデガーを代表的論者とする「自体説(付加価値説)」である。「決定論」同様、技術はコントロールできないと考えるが、価値付加的、つまり中立ではなく、技術が価値を決定して方向づけてくる、と主張するところに特徴がある。

技術が価値を決定するとは、日常の価値観が技術によって左右されるということの意味する。たとえば、若い世代であれば、ケータイやあるいはLINEという技術の力を利用して愛を告白することに、何の違和感も持たないだろう。しかし、ある年齢以上の人々にとっては、そのような大事なことは、やはり相手を目の前にして、直接行うべきものだという感覚があるかもしれない。つまり、ケータイにしろLINEにしろ、ある技術が日常になる以前と以後とで、技術を介してのコミュニケーションの評価がまったく違うものになるのだ。

「今日は会社を休みます」とLINEで送ってくる新入社員に対し、上司が「とんでもないやつだ」などと怒るのは、技術によって生まれた価値づけが異なることで起こるすれ違いなのである。

一方、フーコーやマルクーゼによる「批判理論」の技術論では、「道具主義」と同じく技術をコントロール可能と捉えるが、それは単なる手段や道具的な存在ではなく、技術それ自体に目的と手段が埋め込まれていると考える。たとえば、ストローは単なる筒ではなく、「飲み物を吸って飲む」という目的と手段を持つ。また、技術が価値を決定するという点については、「自体説」と共通する。ストローを使うことが一般的になることで、ストローがあるのに、コップから直接飲むことが躊躇ためらわれるような感覚が私たちの中に生まれる、つまりストローという技術によって、「飲む」という私たちの行為と価値観にひとつの方向性が与えられるわけだ。

以上のように、これらの技術論では「A」B」<sup>3</sup>というふたつの論点をめぐって議論が展開されてきたということになる。

これらの技術哲学の大ボスの存在と云えば、ハイデガーである。難解なハイデガー用語を翻訳するならば、技術とは人間に「で、どうするんだ」と常に問いかけ、挑発する存在ということになるだろう。

私たちはしばしば、個々の技術について、「素晴らしい技術だ」とか「これは危険ではないか」などと議論する。だが、ハイデガーに言わせれば、何らかの危険性が含まれているのが技術というものであり、あらゆる技術は、私たちに問題を突きつけてくる。たとえば、遺伝子改良技術は、遺伝的疾患の治療という善なる目的の下で開発が進められている。しかし、そのようにして開発された技術によって、人間の改良という倫理面に抵触する分野に应用される可能性もある。技術それ自体が善悪両方の面を持つ以上、ある技術を批判して、ある技術を批判しないという態度は表層的でしかない。

そもそも、古代ギリシヤにおけるテクネ(技術)はアート(芸術)も含めたもので、現代的な意味での道具としての技術に限られてはいなかったと、ハイデガーは論じる。芸術は、まさに常識を破壊し、今とは別の可能性を示し、私たちが挑発することによって価値を持つ。そして、ハイデガーは、それこそが技術の本質だと考えた。

問われるべきは、そうした本質を持つ技術に対し、人間はどのような関係を持つことができるのかということだと、ハイデガーは主張する。自律的に進歩し、価値の方向づけを行う技術に対し、人間はただ無力であるわけではなく、技術の側からの問いかけに対し、その都度、判断を迫られている。そのように技術の本質を論じるハイデガーの真の目的は、私たちが人間としての価値観を問われることで人間的であろうと自覚していくことであり、「で、どうするんだ」という技術からの問いかけは、そのための刺激なのである。

しかし、ハイデガーの言うように、「で、どうするんだ」と、技術に挑発され続けることによって、人間は本来により人間らしくなったのだろうか。

これについては、オランダの技術哲学者のピーター・ポール・フェルベークが『技術の道德化——事物の道德性を理解し設

計する』で挙げている例が興味深い。それは、たとえば「Foodphone」(フードフォン)という技術だ。フードフォンは、食べようと思っている食材の写真を撮ってセンターに送るとカロリーなどのデータがフィードバックされる技術である。この技術は、暴飲暴食を避けるきっかけとなる点で健康維持に役立つはずだ。

しかし、社交的な食事の場面でフードフォンを使うのは、供された食事を栄養という観点のみで判断していることが分かっている。招いた側に失礼だと思われることもあるだろう。あるいは、健康維持のために使っていたはずなのに神経質になり過ぎて、食事に対する病的な拒絶反応を引き起こしたり、ストレスの原因になってしまったりするかもしれない。このようにフードフォンという技術は、食習慣に良い効果をもたらすとしても、食事一般との接し方に悪い影響を与える場合もある。そこで、フードフォンの利用者は、自分と技術との適切な関係を考えなければならなくなるのだ。

フェルベークはこうした点に注目し、技術が「人間らしさ」を逆照射する可能性を指摘しているのである。そして、フェルベークは、そこからさらに興味深い主張を展開している。彼によれば、これまでの人間と技術との関係の捉え方は、常に人間を起点(原動因)として考えるヒューマニズム的なバイアスに彩られてきた。そのため、一方には「人間の領域」があり、他方には「技術の領域」があるという前提に基づき、技術の人間に対する侵食や抑圧をいかに防ぎ、そこからどのように人間を解放するかを考えるのが王道になっている。

けれども、フェルベークはこのような捉え方は誤りであるという。なぜなら、フードフォンがそうであるように、たとえば超音波検査技術や遺伝子改良技術などの高度な技術から、自動車の速度抑制をするスピードバンブや、スーパーの買い物カートを元の位置に戻すことを促すコインロック、環境への配慮を代替する省エネ電球、無賃乗車は犯罪であることを思い出させる自動改札機といった身の回りにおける日常的な技術に至るまで、技術は様々な場面で私たちの道徳的な判断や行動に介入しているからだ。技術を人間に対する脅威としてだけ評価するのは正しくない。むしろ技術が道徳的に重要なものになっている事例はいくつもあるのだ。節水を心がけることが道徳的にふさわしいのだとしたら、節水型シャワーヘッドは、道徳的に意義のある技術だと見なしてもいいはずだ。

だから、フェルベークは、人間らしさや道徳や自由などの諸価値は、「人間の領域」にだけ属すると考えるべきではなく、人間と技術との複雑な相互作用の中で、理解しなければならぬと論じている。「人間(らしさ)」とは何かという問いに対して、技術がその問いへの答えに介入しているなら、技術は道徳的意義を持つているということになるからだ。

しかし、そうであるなら、さらにもう一歩踏み込むこともできるはずだ。技術が人間をより人間らしくさせるものならば、人間の側から、技術が人間にとって「善なるもの」となるよう、コントロールすることも考えるべきだろう。

(堀内進之介『人工知能時代を(善く生きる)技術』より。文章を一部改変した)

【注】

\*A I

人工知能。

\*マルクス主義

カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスによって確立された思想体系。

\*ビッグデータ

携帯端末やICカードなどの利用により集積される膨大なデータのこと。

問一 傍線部Ⅰ「AIが道具かどうかはとりあえず置く」と筆者が述べているのはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア AIは、社会や人間とは関係なく自律的に発展してゆく「技術」に過ぎないため、それを人間との関わりにおいて「道具」と見なすかどうかは重要な問題ではないと考えたから。

イ AIがこのまま進化して人間を支配するようになれば、人間の方が逆に「道具」にされてしまうため、現時点でAIの存在を議論しても意味がないと考えたから。

ウ AIを単なる「道具」と見なすかどうかは、「技術」をどのように捉えるかによって見解を異にするため、先に「技術」について確認しておく必要があると考えたから。

エ AIは、我々人間が何かを行う際に使用するものである以上、コントロールできるかどうかにかかわらず、「道具」であること自体は議論するまでもなく自明だと考えたから。

オ AIが人間のコントロールを受け付けなくなつて暴走する可能性もあるため、いつまでも人間にとつて都合のよい「道具」のままでは限らないと考えたから。

問二 傍線部2「決定論」では「技術」をどのように捉えているか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 技術が、人間の管理下を離れ、人間社会とは無関係に進化してゆくものである以上、たとえ技術が悪の側面を持っていたとしても、人間はそれをとやかく議論できるものではない。

イ 技術は、あらゆる事柄に影響を与えるものであるから、政治においても、国民の意志を反映したビッグデータのような技術を活用して物事を決定すべきである。

ウ 技術は、我々の社会構造や意識までも左右する存在であるが、人間が制御できないところで自律的に進化してゆくものであるため、人間の側がどう批判しようとも無駄である。

エ 技術は、社会構造や人々の意識のあり方、我々の価値観にまで多大な影響を与えるものであるため、技術的・科学的な判断に従って政治を行う方が、従来の政治よりも合理的になる。

オ 技術が善と悪のどちらの側面も持っていることは認められるが、技術的・科学的な判断に基づいて物事を決定してゆけば、善悪の判断を超越した客観性を保つことができる。

問三

空欄

A

B

に入る表現の組み合わせとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア A 技術は人間にとつての道具であるか B 技術は社会と無関係に存在するのか

イ A 技術は人間にとつての道具であるか B 技術が価値を決定するのか

ウ A 技術はコントロール可能か B 技術は善か悪か

エ A 技術はコントロール可能か B 技術が価値を決定するのか

オ A 技術は善か悪か B 技術は社会と無関係に存在するのか



問四 傍線部3「ハイデガー」は「技術」についてどう考えていたか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 技術は、芸術的な側面も持ち合わせており、我々の常識的な価値観を揺さぶって判断を迫ってくる存在である。
- イ 道具としての技術と、芸術の一部である技術とは、はっきり区別することができない不可分の存在である。
- ウ 技術それ自体には善も悪もないのだが、我々人間が持つ常識を破り、我々を挑発してくる点で厄介な存在である。
- エ 技術は人間を挑発する危険な存在であり、それをどうコントロールするかが人間らしい生活を送る上で重要である。
- オ 我々の価値観を破壊し人間を挑発する技術は、人間の敵であると同時に有益な刺激を与えてくれる存在でもある。

問五 つぎの中から本文の内容に合致するもの一つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア ハイデガーは、フイーンバークが分類している四つの技術論を否定しているが、ハイデガーの考えにも不十分な点があるため、筆者はそれを補完するものとしてフェルベークの技術論を紹介している。
- イ 批判理論の技術論は、「技術には最初から目的や手段が埋め込まれているがゆえに、技術は人間にとって欠かせない道具である」と考える点で、道具主義に通底するものがある。
- ウ フイーンバークが分類した四つの技術論は、「技術は、人間と対峙する別の領域に属する存在」と捉えていたが、筆者はハイデガーやフェルベークと同様に、そのようなヒューマニズム的な先入観を批判している。
- エ 「技術は人間にとって便利な道具に過ぎない」と考える道具主義と、「技術それ自体に、我々の生活を左右する大きな価値がある」と考える自体説とは、前提から大きく異なっている。
- オ 「技術と人間の密接な相互作用の中で人間らしさや道德などの諸価値が決まる」とするフェルベークの考えが正しいならば、逆に、人間が技術に対して影響を与えることも可能だと筆者は考えている。

問六 傍線部4「技術が「人間らしさ」を逆照射する」とはどういうことか。つぎの形式にしたがって、三十字以上、四十字以内  
でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

とらうこと。

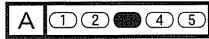
### マークシート解答方法についての注意(共通事項)

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどを使用しないこと)。

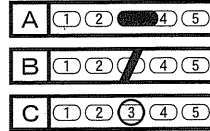
#### 記入上の注意

1. 記入例 解答を3にマークする場合。

(1) 正しいマークの例



(2) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

2. 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
3. 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
4. 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

### 「数学②」(情報科学部・デザイン工学部・理工学部・生命科学部)

#### マークシート解答上の注意

「数学②(情報科学部・デザイン工学部・理工学部・生命科学部)」は「数学①(それ以外の学部)」と異なる科目です。

問題中の ア, イ, ウ … のそれぞれには、特に指示がないかぎり、- (マイナスの符号), または0~9までの数が1つずつ入る。当てはまるものを選び、マークシートの解答用紙の対応する欄にマークして解答しなさい。

ただし、分数の形で解答が求められているときには、符号は分子に付け、分母・分子をできる限り約分して解答しなさい。

また、根号を含む形で解答が求められているときには、根号の中に現れる自然数が最小となる形で解答しなさい。

〔例〕  $\frac{\boxed{\text{ア}} \sqrt{\boxed{\text{イ}}}}{\boxed{\text{ウエ}}}$  に  $\frac{-\sqrt{3}}{14}$  と答えたいときには、以下のようにマークしなさい。

ア	●	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イ	⊖	0	1	2	●	4	5	6	7	8	9
ウ	⊖	0	●	2	3	4	5	6	7	8	9
エ	⊖	0	1	2	3	●	5	6	7	8	9

※ 「数学①」の選択肢には- (マイナスの符号) はありません。